

万博公園探鳥会

2023年6月10日(土)

リーダー 田中宏・中筋好子・橋本昌宗・大矢麻由美
有賀憲介・平軍二(090-6901-1425)

1. 千里の鳥・万博の鳥「シジュウカラ・ヤマガラ幼鳥」

(写真 橋本昌宗)



今月の鳥は5月万博公園で観察したシジュウカラ・ヤマガラの幼鳥とした。大阪近郊の平野部～低山で必ず観察できる樹林を象徴する2種で、万博公園にも一年中、生息している。

万博公園を歩くと、昔から千里丘陵にあった木々がそのまま残っていて、深い樹林になったと思われるほどである。実際は1970年日本万国博覧会が開催され、林立していたパビリオンが終了後に撤去された跡地に、新しく小さな木々を植え、50年経過し生長した人工樹林の姿である。

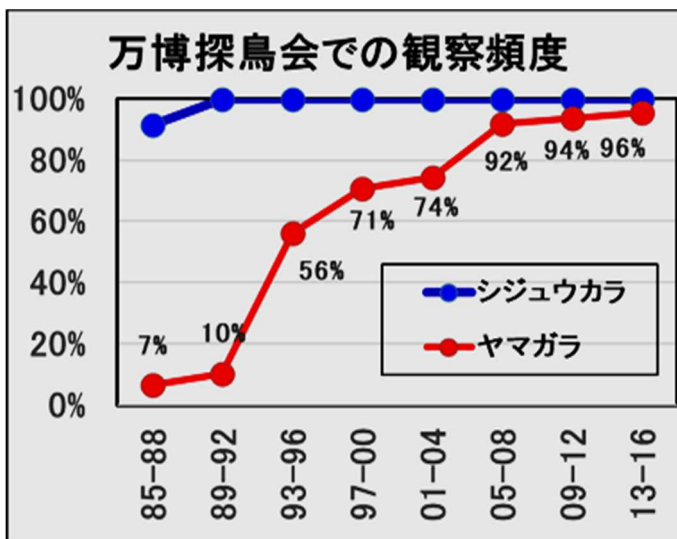
万国博覧会終了15年後の1985年にスタートした万博公園探鳥会では、シジュウカラは当初から観察できたが、ヤマガラは観察できなかった(★1)。

木々の背丈が低く、樹林としては疎林であったことで、シジュウカラはいたものの、ヤマガラは生息できず、樹林の生長とともに定住し始めたことを示している。

シジュウカラ・ヤマガラを象徴する行動に「カラの混群」がある。春から夏の子育て期は番(つがい)で生活しているが、繁殖期が終わると、他の鳥と群をつくって、一緒に行動するようになり、「カラの混群」と呼ばれている。万博公園での「カラの混群」はシジュウカラ・ヤマガラを中心に、エナガ・メジロ・コゲラなど留鳥が常連で、稀には秋の渡り鳥のキクイタダキ、冬鳥のヒガラなどが入っていたこともある。

混群はそれぞれ鳥が自由に行動しており、エナガは樹冠付近、ヤマガラは太い木の枝、シジュウカラは林の中ほどから地上に、コゲラは幹を上下するなど、それぞれ自分の好む餌を探しつつ移動している。ヤマガラがエゴの実、メジロが花の蜜など好きな餌を見つけると、やや遅れ気味になり、群れから別れることもあるが、通常はエナガが先頭、コゲラが最後尾で、10羽～数10羽の群として続く。

混群になる最大の理由は、ハイタカなど捕食者から身を守るためといわれている。どの種かの1羽が危険を察知した時の声で、群全体の小鳥が危険を知ることができ、「周囲を警戒する目と耳が多い安全性の高い集団にいる」ことになる(★2)。



ヤマガラの探鳥会での観察頻度は図のように年々アップし、今ではシジュウカラ同様ほぼ毎月観察できる鳥となった。1985年の万博公園はまだ

★文献1 平「万博公園探鳥会記録」

★ "2 ピノッキオ編著「鳥のおもしろ私生活」主婦と生活社他

2. 5月探鳥会結果報告より

シジュウカラ・ヤマガラのほかエナガなどの幼鳥を見ることができ、日本庭園ではオオタカが上空を飛んだ。今日は午後から雨予報だったので、「雨が降ったら終了」としてスタート、少し行程を早めた結果、日本庭園東側の鳥合わせ場所「旋律の鯉池」で雨が降り終了とした。



ハクセキレイ(橋本昌宗)



エナガ幼鳥(橋本昌宗)



オオタカ(橋本昌宗)



カワウ(橋本昌宗)

春の渡り鳥がキビタキのみにとどまったこともあって、種数は昨年2022年27種より少ない23種にとどまった。

水草の池・観察の森の池などでは、この季節の万博公園の風物詩ともいえるモリアオガエルの卵塊を観察した。



モリアオガエル卵(橋本昌宗)

3. 万博公園空中写真 (大阪府万博記念公園事務所提供)



1981年

1970年、千里丘陵で開催された「日本万国博覧会」終了後、パビリオン跡地に木を植えられ、「万博公園」となった10年後の1981年、田植え直後の田んぼのように、植えられた木の1本1本が見えます。この頃は植えられた木々の間が草原状態にあり、キジが好む環境でした。1985年にスタートした探鳥会で、キジの雄の声「ケーンケーン」を50回も聞いたことがありました。

その後10年あまり、1992年には木々が育って樹林となり、草原状態の所が無くなり、キジは住めなくなりました。万博探鳥会でキジの声を聞いた最後は1998年5月でした。その後、2012年の万博公園早朝調査で1度だけ、確認されています。(↓写真)



1992年



← 20120419 万博公園で確認された最後のキジ(廣瀬達也)

キジが万博公園にいなくなった理由が、「木々が育って草原が無くなったため」とわかったのは、2枚(1981年・1992年)の空中写真でした。探鳥会での「キジの観察頻度」は右図の通りで、P-1に示した「シジュウカラ・ヤマガラ観察頻度」の変化と同様、万博公園の森の変化(=樹林の生長&草原の消失)により、生息できる鳥が変化したことを示している。

探鳥会でのキジ観察頻度→

